

20240909 この田や畑はどうなっているの？「終農」の危機！

1学期の6月に、中村紀先生と尾瀬の实地踏査に行かせていただきました。関越自動車道でいきました。車窓から、普段自家用車では気が付かない景色との出会いがありました。バスの高い座席位置からは、普段見えない遮音壁の向こう側の景色がとてもよく見えたのです。

関東地方は、古墳の数でも有数です。そもそも埼玉県は県のマークは勾玉です。確認されている古墳の数は、埼玉県が3,114基、群馬県が3,504基で、大仙古墳のある大阪府と並びます。ちなみに、全国1位は兵庫県の18,707基で、2位は鳥取県の13,505基で桁外れです。意外なのは、大国主命の治めたといわれる出雲（島根県）は2,710基で全国17位です。

つまり、高速道路から何だかこんもりしていて木が鬱蒼としたものが見えたら、大抵は古墳だとみて間違いないということです。それを見るのを楽しみに外を眺めていました。しばらく眺めていて、違和感を覚えました。入間川、荒川、利根川と続く関越沿いの地域は、この時期なら広々とした田園風景です。实地踏査は6月20日でした。それなのに、田起こしすらしていなかったり、むき出しの土のままだったりする区画がとても目に付いたのです。

政府は、減反政策こそ廃止（2018年）しましたが、米から大豆などへの転作を推奨していることは変わりがないといえます。むき出しの土の区画は、これから米以外の作物を育てる予定なののでしょうか。それにしても草茫々の区画はとても気になりました。

「終農」という言葉が頭をよぎりました。それからは、放棄された農地が目について仕方ありません。耕作放棄地と思われる土地を眺めていて、農家の無念さが胸に迫ってきました。何代にも、何年にもわたって心をこめて耕し、手入れをしてきたであろう農地が無残に荒れていくのを黙って見守るしかない、その決断を自分の代でしたその悲しさと悔しさです。

現在、日本の農家の平均年齢は68.4歳（農林水産省）です。これだけでも深刻なことなのに、5年後は単純に73歳になるとすると、これは由々しき問題です。殺人的な猛暑の中、日陰のまったくない田や畑での労働、より頻度と破壊力を増す集中豪雨や台風の脅威、高騰する燃料費や肥料代、経験が全く活かない気候変動への対応、そして確かな収穫があったとしても信じられないほど少ない実収入、・・・

1年に1回しか収穫できない米作りにあっては、一度の脅威が収穫ゼロという危機に直結します。8月以降、東北地方を繰り返し線状降水帯の脅威が襲いました。台風10号は、記録づくめの大雨を降らして列島に居座り続けました。ちょうど、稲が花を咲かせ、穂をつけるときでした。この時期に穂が水につかったり倒れたりしたら、その年のお米は終わりです。もしそうなってしまっ、収穫が見込めないことが分かった時、68歳の農家さんは「よし、来年こそは！」と思うのでしょうか。年々この気候危機が深刻さを増し、もう昔には戻らないという暗い見通しの中で、チャレンジングに「負けてたまるか！来年こそ！」と挑もうとす

るでしょうか。

むしろ、「もう十分やってきたよな」と、この危機を「農業を終わり」にするいいきっかけと捉えてしまうのではないのでしょうか。

こうした危機を教科書では扱いません。しかし、断崖絶壁に立っているこの現実に向けないで、まるでそれなりに上手くいっているかのようなイメージすら今の教育は与えている気がします。問題があるとしても大したことではないのではないか、未来も今と同じであり続けるだろうと安易に考える学びになってしまっているように思うのです。

「危機を知って」「どんな未来を創っていきたいか」と、問題意識を持って学びをすすめることが大切です。